Title	イギリスの演劇的風土について:民族的芸能の展開
Author(s)	柏倉, 俊三
Citation	北海道大學文學部紀要, 19(1), 1-29
Issue Date	1971-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33349
Туре	bulletin (article)
File Information	19(1)_PR1-29.pdf



イギリスの演劇的風土について

民族的芸能の展開

柏

倉

.

俊

― 民族的芸能の展開 ―

ゲルマン人が協力して亡びに導いた古典劇の後に、 の時期における演劇本能につながる演劇展開の諸要素がいろいろ複雑だからである。 は、 過去数世紀にわたる長い準備期が控えていたのであった。この準備期という言葉の意味は必ずしも簡単ではない。こ 盛況を現出することになるのである。この爆発的現象は、 として使用された 大学 や王 侯貴族 または公共施設の広間などを別として、公式にいわゆる劇場と銘打ったもの (1564~1616)や Marlowe(1564~93)の生れた時には、イギリスには特別の目的、 一つもなかったということになってくる。それが、その後僅か数十年でギリシアを除いては見られない空前の演劇的 ンドンの北部 Shoreditch に Leicester, s Men の James Burbage が 五七六年のことであった。これは、この国はじめての一般庶民への、公開劇場であったから、Shakespeare キリスト教会が自らの中に育てた、 一見まことに奇異に見えるけれども、 「演劇場」the Theatre をつくったの 特別の観衆のためへの上演場所 一たびは中世のキリスト教会と いわゆる教会劇を、 実はこの背後には 近代演劇

北大文学部記要

ル それでここでは、 なもろもろの雑芸、 いづれにしろ、 れをうけとって、 エ マン族の一支族として大陸に居住していたときからの民族的な芸能のみを主題として、その消長を扱い、イギリス リザベ ス演劇という大河を形成したことになってくる。 源流 と見るならば、 イギリスにおける教会劇の誕生に先立って、 本題すなわち「イギリスの演劇的風土について」の下で、 エリザベス朝演劇という大樹に育てたイギリスは、すぐれた苗床であったということになってくる。 祭事、 催物などが豊かに賑わっていた。これらはみな演劇が育つ風土をつちかったものであった。 前述の諸要素はそれぞれ一つの またこの教会劇を近代演劇の一つの種子というならば、 すでに演劇につながる諸要素例えば民族的庶民的土俗的 源流あるいは支流となり、 もろもろの雑芸のうち、 これがことごとく合流 イギリス人がゲ

ì

ギリ

演劇的風土としての特質の一部を明らかにしたい

に る。 は戦士として戦陣にも出入し、 彼らは南欧の芸人たちとはちがって、その社会的地位は高く、自らの領土を有し、 楽師があっ 琴に あわせてうたい、戦士たちの無聊を慰めたり、 た。Beowulf などに 、Scôp (Sceop) とか gleeman (gleómon) という語で呼ばれるのがそれであ 陣営または城砦の宴席にあって、 土気を鼓舞したり、 武勇や冒険などを主題とした即興または伝承の歌 また座興を添えたりもしたのであっ 楽人として君側に侍し、 時

ス人の先祖がまだ大陸に居住し てい たこ ろ他のインド・ゲルマン民族同様彼らの間には一種の職業的

た。

中世では minstrel

したがって王侯貴族はよろこんで彼らの歌曲に耳を傾け、彼らをその配下に抱えたのである。

すなわち弾唱詩人と呼んでいる。

これは本来「お抱え芸人」の意味であった。これらの

このような歌びとを総

詩人同様、 あたかもわが武者修行の武士のように諸国を遍歴し、自らの技を競い、褒賞を喜んだりしたことは Į, その主人の許可を得てではあるが、 彼等の風習にしたがって、 所に定住しない

Poetry 中の最古の一つといわれるWidsith やDeor's Lament などによっても明瞭である。 前者では、

他の財宝を贈られている。 のぼり、その足跡は少くとも旧ヨーロッパ中部、 際の遍歴の記録としてうけとるべきではない」としても、またこの詩篇中には後人の添加があるとしても、 出身の主人公 Widsith もちろんこの詩については、 が外国への使節に従って隣国に赴くことになるが、 近東の一部に及び、十数ヶ国の君公に会い、 いろいろの説があって、「Widsith その御前に演奏して金銀その は一実在の gleo mon の実 つづいて諸国遍 例えば 歴 の旅

の地位と領土を彼のために失ってしまった悲しみと不運をば、 なわち大陸におけるイギリス人の先祖たちの風習をうかがうのに格別の支障はない。またDeor's LamentのDeorは、 the Heodeningas Persians のScôp であったが、Heorrenda なるものが彼の技を凌いだので、 ∜ Hebrews などについてのくだりは 追加であるとしても、 古の英雄たちの忍苦を偲んで、 いまでは、 諦めようというのであ なおその中には当時す Deor は

彼らが互にその技を競ったことを知らせてくれるばかりでなく、

これらの歌人が流浪のものとも限らなかっ

たことをも教えてくれる。 の作 まの島国に持ち込んだのであった。 大陸 品の内容は、 Gren del での彼 の忌み嫌った竪琴の音と Gleómon ķŝ らの風習を示すものではある。 まのイギリス人の本土ではなく彼らが大陸に居ったころのものであるから、 さらに例の Beowulf にはこうした その最も簡単な、 しかしこれらの風習をイギリス人は彼らの他 や王はじめthanesの歌声がきかれたのであった。 手近な例証を、 Gleómon の活躍が見られる。 私どもはイギリス最 Hrothgar © 初 の詩 0) これらの風習その 風 人 とい しかしこれ とともに わ n

北大文学部紀要

the Danesとの戦いに志を得ず、意気消沈の折などは歌謡をうたって、自ら慰めて気力を恢復したといわれるが、 Cædmonの伝説的物語に見ることができよう。 たこうした異端の歌であったことは推測に難くない。こうした彈唱詩人すなわちMinstrel と大同小異の性質、 であった。」 そしてこれによって彼ら侵入者は士気を鼓舞したのであった。後年 King Alfred (849— 899) なども、 とブリトン人との長い争いは、Northumbria でもまた Wessex でも、 とにかくブリテンの島に「つぎつぎと侵入を繰り返したイギリス人 たしかに多くの新しい歌曲の誕生を促したの その歌はま

されているが、 ケルトの世界のものであり、ゲルマンの場合と同じような使命をもっていた。現在ではもっ と 通俗的 な意味で使用 ろ異名同質のものに、Bard と呼ばれるものがある。これは poet-singer とか strollingèmusian とかいう意味 竪琴に合せて歌うのであった。 そのもともとの職業は、 部族の族長たちや戦士たちの業跡、歴史的事柄、あるいは民族の伝承などの いま Wales では地を変えて行う年次大会であり一種の芸能祭であ

る Eisteddfodで認められた poet をいうようである。

最もはなやかな活動期は十一世紀―十三世紀といわれているが、 という意味が発達したものと考えられている。もともと Troubadour は、 われている。 にその郷土をもつ弾唱詩人、 に最も多く住居していた詩人、 つぎにフランスの系統をもつものに、Troubadour 及びこれにとても似ている言葉の Trouvère がある。 その語義は判然しない、しかしフランス語の trouver イタリア語の trovare なる動詞につながるものと一般からいわ すなわち「見つけ出す」「新工夫をする」あるいは「詩をつくる」というような、 吟遊詩人の一種である。前者Troubadour は、その語形を見てもラテン系であることはわかるけ 歌人たちの総称であって、東スペインや北イタリアにも散在していたようである。 南仏なる地中海岸のイタリア寄りの地方 Provence この派の著しい特色はその主題にある。 何事かをつくり出す ともにフランス すな

雄的なものというよりも騎士たちの情緒生活、 どは、その例としてあげることができよう。 参与したのであった。 なわち十一世紀にでているが、 を歌ったのに比べてTrouvèreはしばしば粗剛な調べで武勇の物語を扱ったのである。そしてほとんど同じころ、 流派に影響を与えたようである。 抒情詩が主となってくる。ところがTrouvère の場合は、Troubadour 同様ともにその起源をフランスに持ちなが わちイギリスや北欧の scôp や gleómonの場合は英雄及び 英雄的 行為であったのに対し、彼らの好んだ 主題 めて述べるまでもない周知のことである。 その性質はややちがってくる。この一派は、北フランスがその郷土であり、そしてこの郷土の条件がまたこの 他の分野にも影響を及ぼしたようである。すなわち後者は、 Chanson de geste, Legend of the Round Table, Romance of the Rose, Reynard the Fox 後者はいろいろの要素を吸収し、そくばくの変質をも見せながら、 即ち前者が絢爛華麗な言葉を操り、 また前者が近世イギリス抒情詩の興隆に大いに寄与したことは、ここに改 またここに附加したいのは、 恋愛などであって、前者が叙事詩であるのに反し、 流麗な調子を奏でて、愛情の美しさ特に恋愛 中世の物語詩、 ドイツの第十二世紀—十四世紀にかけて 英雄的叙事詩などの成生にも これはいきおい 第十四世紀まで は す

性質の上に髄分の変化がきていたのであった。 ったところからでてきた名称であって、時代もたって、 ものであるが、これは、 に立つというよりは 恋愛を歌って巡遊した詩人 Minnesinger と称せられる一群の存在したことであるが、これは北欧的な Scôp の弾唱詩人、 吟遊詩人の意味に用いられている。これはNorman Conquest 後は、イギリス国内にも入って来た むしろ Troubardour の系列に入るものなのである。 juggler などと同義で、 これらの吟遊詩人が、 このころになると、 やがて坐興に現代の手品師のようなことを行 弾唱詩人、 また同じく中世に 吟遊詩人そのものにも、 Jongleur な

III

.民族固有の性質のほかにその置かれた地理的事情のためもあって「イギリスはその歴史では相当後にいたるまで ことになるのであるが、イギリスの場合は、必ずしも大陸の同族とその歩調をともにしていない。それのみか、 族などとともに、キリスト教の影響下にさらされ、これといろいろの交渉をもつことになり、 ーマの影響から離れており」随ってゲルマンの Scôp のはじめからの展開とその後のローマ的要素例えば Roman そのままこの国に移入された次第をさきに述べたが、その大陸の同族は、大陸の他の民族、 イギリスでは、早くから大陸よりその同族の風俗習慣をそのままにうけつぎ、Scôp とかgleomon その本来の面目を失う 主としてラテン民 その

をもつ文学的芸能的 は南北よりこの国を照しはじめた。 の一支族としてブリテンの島に渡った時、彼らイギリス人は、彼らの民族自身の独特の歌を止めなかった。 Mimus などとの交渉、混入、汚染の次第をうかがいうる便利をもっているともいえるのである。とにかくゲルマン族 ブリトン人との長期抗争は、 いろいろの歌の誕生を促したと考えてよい、ただ King Alfred やその他の人たちを激励した歌謡が忘れられてしま しかしその際彼ら僧侶自身に多くの矛盾を見、 わずかにその痕跡をThe Anglo-Saxon Chronicle などにのこしているのみであって、一般から忘れられたまで ところが、六世紀の終り、この島の征服が大体終末に近ずくと、 風習 の進路 彼らの志気の鼓舞のためにも、 に方向転換を促した。 精神界のこの大事件は当然日常万般における彼らの進路、 右手と左手とではその持つものがちがってもいた。 僧侶の手によって当然宗教文学が生れるからである。 その民族の竪琴のうたはその必要度を高め、 キリスト教の伝来が 特にこの異端的内容 例の Ald helm あってその光 それ そのために のみか

して作者不詳の Judith などは、 この場面はサクソン人であるが Northumbria 即ち Angles た国だけであって、 たちを待ち伏せて、 または上aldhelm (640 – 709) 聖なる題材にもかかわらず、 すでに触れたとおり、聖職につながる Cædmonが天地創造をはじめ聖なる歌の一連をはじめてい 歌をきかせたけれども、 は、 そのまま、 その感覚や理解はゲルマン的北欧的であったのは、 彼自らが恰も gleomonであるかの如く、 豪壮豪快、 自らまた聖歌を書いたのでもある。その場面はウエセックスであるから 誠実ではあるが沈爵、 の場合は、 当時文化面ではイギリス全土の魁をなしてい 橋の上に屯し、 戦闘的 悲劇的 是非もないことであった。 ミサから家路をいそぐ人 なゲルマン気質の見本

おり、 声であり予言であり、 はなく、 装によってであった。 は竪琴弾唱者に扮装してであったし、 なおも存続し活躍していたことは、 ていない姿体からもうかがわれる。 てこれをキリスト教的なものと調和させるかというところに、 なくなったのではなかった。半は異端の八世紀の悲歌 として Heorot のようなホールでの弾唱に耐える歌とはなったのである。 八世紀以後になると現在のような古英詩は不可解な終りをとげている。 Chronicle世事から起ったのであった。 の中にでてくる戦争詩などに充分の投影を見せるけれども E.K. Chambers などもいうとお .もともとゲルマン民族の信奉していた北欧神話の世界にあっては. 作詩は、Caedmonの場合によっても察せられるとおり、 歴史そのものが語ってくれる。即ち Alfred しかしやがて作品としてはこの種のものは姿を消し、その後は僅かに The Anglo-またこんどは逆に Anlaf が the Saxons The Seafarer などを貫く魅力は全く異端的、 The Wanderer なども流浪の原因はキリスト教による追放で 作者や弾唱者の苦心があった事実は、 そこで実際の場合古風な弾唱詩 しかしこの Scôp や Gleómon などの の鼻をあかしたのは、 が the Danes を欺いたといわれるの 神の業であった。従ってそれ自体当 ゲルマン的なもので、 詩は Odin (Woden その首尾一貫し 同じくこの扮 人は消えて 如何にし

る。 shopたちの住居で Scôp な異端的なものに与えられる恩恵が問題になっていたのであった。 の顧問であった『Alcuin も Lindisfarne 説 だされたのであった。 イギリス関係事項 者たちは、 である。 を含んでいた。 割を果すようになり、 聊に苦しんだ貴人や武人に楽しみを与えては金銀珠宝をめぐまれ、 諜者の任務を果し、 は民族的異端のうたでもあり、民族のうたともなったものに、同情を表白することを恥辱とは考えていなかったよう を与え、他面書物のない時代の記録係などの役割を果し、 然尊敬をうけるべきものであり、 地位を保持したばかりではなく、 その ろいろの風説を流布し、 しかもこの歌手たちは、 特にこの歌手たちが宗教関係の施設に引入れられることを攻撃した。そして六七九年には 約 一百年 にもかかわらず Alfred 処理 さらにすすんでは囚われの主人などを救い出すというようなこともあったのである。 West Saxon 温厚の長者の名声を恣にした Venerable Bede (673-735)さえ 当時 単なる一介の楽士では終らなかったのである。 の宗教会議で、 たちの、 流言蜚語を流して、 大体に於て教会そのものからは公的には好意をうけとれなかっ かかる演出が行われることを歎いている。 王 Edgar の名臣 Dunstan しかも彼ら Scôp は王侯貴人の側に侍してその職責を果すものであるから当然相当 随時随所に自由に出入できる特権をもっていた。 また七四七年には Clovesho © bishop 大王のような敬虔な俗人はもちろん多くのキリスト教の なる Higbald 興論をつくり、 雑誌や新聞のない時代に報導の機関となり、 が、 に対して書翰を与えて、 このように、 この国の宗教界の革新を決意した時も、 の宗教会議で、 さらに広場または酒場などに集る聴衆によろこび その煽動者となるなど、 慥かに Scôp は、その中に随分と異端的なもの また第八世紀の終り Charlemagne 教会のみならず、 ともにそれらについ そこである時は敵中に潜 同様趣旨の警告を行ってい 社会的に た。 bishops 為政者たちもたび も随 ローマ あるい 層厳 ての禁止 分重 彼らは、 にあった 重 は道聴途 一な聖職 な役

関係した上級僧職や為政者が、 たび法令、 材料が見当らないといわなければならない。しかしそれらのことはともかくとして Scôp はなかった。 づれにしろ 的異教的であるだけに、 布告その他の方法で、 しかも当時のこの教会側が Scôp に示した敵意は Scôp そのものの活動の側からは、 ゲルマン世界とローマ化されたキリスト教世界との距離は大きかったのである。 この弾圧は、 実際には彼らを歓待し、 表面的には彼ら Scôp それだけ、異端世界のキリスト教世界への推移に役割を果すことであった。 その来遊をよろこび迎えたことは、 たちにきびしい批難を浴びせながらも、 の歌は、 決して理由 その法令や禁止令に キリスト教側 充分の説明となる 本質的にゲ 'n か

は不道徳で粗野かつ戦闘的で血醒い行為を主題とする歌が一般にゆき亘ることは快いことである筈がなかっ

の荘 ばラテン文化の一現象として、 こにはローマ世界の影響がようやく濃厚になっていった。 古 ましからぬ諸芸が」加えられるようになった。しかも、 も高邁な風格を失ってしまっていた。この中で、はじめは、 そしてその悲劇から流れでたのが、Pantomimus |典劇の末 らぬ諸芸」 劇にその遺鉢を伝えたが、 重さ典雅さを失い低 くして異端世界のキリスト教化がすすむにつれ、 流 に対して、 わばその鬼子的存在であって、 よけい加えられたようである。 俗卑 猥 南欧より伝えられた Mimus 及び ローマも末期になると、 な演 劇即ちたわむれとなってしまい、 古典劇の惰落した、 であった。これは大体神話を主題としたものではあるが、 前述の歌手たちに加えた批難は、この一新奇な、まことに好まし この古典劇は国勢の衰退と市民の逸楽にこたえて ところで、この諸芸こそ、 そして歌って竪琴を奏でることには、『新奇な、 それまでのゲルマンの世界には、 歌の部分だけが歌誦と音楽に伴われなが Pantomimus 的要素のものであった。この二つ なれのはてであった。 もっぱら観者の低俗さに応ずることになった。 キリスト教の伝来とともに、 すなわちギリ 推移と変転が起り、 b 無言 まことに好 シア劇は はやく かって いわ は そ D

北大文学部紀要

このはなやかな舞台から転落し、 概して彼らは、奴隷でありあるいは奴隷の階級に属し、もちろん社会的地位も低く、したがってまた健全な社会の分子ではなか あった。 写実的であり、 シヤ植民 えあった。 に散じ、 に及んで、 た。それだから当然社会は彼らを敵視し、これを攻撃したのである。 庶民にうけたのでもあった。 ともとこの笑劇は った。しかし、他面また収入なども豊富であったため、その私生活などは贅沢華美であり、害毒を良俗に流すという風が 一体が 系芸人とか、 歌 そして 中 地から伝えられた一種の farce(笑劇) 誦と音楽に伴われた無言の身振舞誦となってしまった。 世 この惰落した演劇も当然その運命をともにせざるを得なかった。そして支柱を失ったその関係者たちは 他方 Mimus りで示され対話 0 これらの演技者は、 この舞台にはじめて登場することになった婦人のうすものの服装などは、はなはだしく煽情的でさえ 流浪の芸人の社会をつくることになったのである。 Pantomimus いわれるものであり、これがキリスト教の伝来以来、大陸文化とともに 諷刺性をもっており、 は、 この流入はすでに八世紀の出来事であり、 古典の喜劇の末流であり、 しかしその風刺が時には度を越して、 の部分が俳優によって演ぜられたものであるが、 が多く上流社会に応じたのに対して、これは特に一般庶民に喜ばれたのであった。 奇術師あるいは動物使いなどに身をおとしたり、 古代ゲルマンの弾唱詩人や吟遊詩 それに低俗卑猥な舞踊道化などが加わったものであって、 であった。 縁者であった。 その主題は多くは不倫の恋愛であり、 所作全体が頽廃的官能的であり、 この流に立つものが、 為政者の怒を買い、作者が火刑に処せられるなどの やがてローマ帝国が北方蛮族のために滅亡する もともと、 人が 地位ある家臣や戦士であったのに比して それにつづく二百年は、 後には対話の部分がことごとく脱落し これはイタリア南部 またはそれらの中に混入して諸方 ķ わゆる南欧系芸人とか、 イギリスに流入した その継続であったと しかもその 時には煽情的でさ その点また特に のあるギリ

0

は

自然

の数であろう。

pantomimusなどの語を解説する注などによって、充分察知することができるのである。 に出てくる数多のおどり手、 い得よう。もちろん、この時期は文献の最も少い時期ではあるが、しかし当時のラテン及び古代英語の稿本その他 時の経過とともに、程度の差こそあれ、除々に混合が行われていったのである。 曲芸師、 手品師、 熊つかいなどの彩色挿絵の類などにより、 かくしてゲルマン系の歌い手 また mimus, iocista, scurra,

scop, and not a chorus, before the Ostrogoths in Italy, at the beginning of the sixth century. とそれるりと 四六二年から四六六年の間に the Visigoths の王 Theodric(東ゴス王とは別人)の場合にも、同じようにこうした に侵入した、the Vandals その征服した領土のmimi(あるいは mimus)は、彼らの酒席に坐興を添えたらしい。 が、その人選をするというようなことが起るのである。これらの蛮族は、もちろん演劇に興味はなかったが、しかし を遺わし、 になり、かくして、また五○七年フランク王 Clovis I(d· 511)は、逆に、東ゴス王 Theodric(d.526)に対して人 ゲル マン人 ではないが、当時の彼らゲルマン人の風習や嗜好をうかがうに足りるであろう。即ち四二九年アフリカ の道化によって笑わせられた、 想像に難くない。そこで、 453)の招宴において、各国使節は、はじめは古い昔の武勇談にその心情を煽られ、つぎに Scythia 及び Morris それについての大陸の場合の記録は、なお少いけれども、この平行二線の混入は、民族の移動混入と運命をともにしたことは、 南欧の音楽を学んだ citharoedus を求め、そのため Theodric は、 Ancestral deeds were sung to the harp, and therefore, it may be supposed, by その地に人気を博していた見世物 (spectacula)を大いによろこんだといわれ、 即ち相反する二つの悦びを誘う催しによって遇せられたという。Attilaは、 の重臣の哲学者 Boethius (ab. 474~525 また四四八年例の Attila (?ー もちろん

見世物が、ところを得ていたといわれている。そしてこうした二つのちがった系統の娯楽の混合融合は、

方において Charlemagne はその同族同様、 対する影響力は強く、 であった。そしてこの点に関しては、さきに述べた例の Alcu in がその代表であった。そして彼の Charlemagne に み、 しかしこの二要素中での見世物式のものに対しては、この場合も、イギリス同様教会や聖職者たちの排撃するところ その後三世紀 Charlemagne 大帝(742- 814) 例 0 中世 の代表的武勇物語 したがって、 いろいろの形で、この南欧的要素の見世物禁止の措置が講ぜられた。 Chanson de geste にその基礎を与えるという風であった。 北方的な豪快勇壮な物語の楽奏を大いによろこび、その宮廷で演出した の治世中にioculator なる名称の下に行われるようになった。 ところが the

リスの場合も大陸におけると同様、 年培ってきた弾唱詩人の社会的地位はは殆んどゆるがなかったといわれている。かくの如くしてこの二要素は、 たと考えてよいようである。 その昔ながらの地位を保持して上流の社会に迎えられ、 結び合せた繩のように、からみ合って推移展開しだが、 ローマ系のものは、 むしろ一般庶民をよろこばせ 大体に於て、 ゲルマン系

その子 Louis I は父の好みをうけつがなかった。 そしてそれらにも抑圧を加えたが、しかし永

と呼ばれた、

IV

nanburh (937)や Maldon (991) の激戦などによって象徴されるような烈しい争闘が、 亘ってつづけられ、 らはもともとアングロ・サクソンとは同族であったから、その風習もまた似ていたことは当然であり、したがって Bru-る事情のところに、 この間戦場での彼らの士気の鼓舞や敵状や敵国内の事情調査に、 イギリスでは例の The Danes 即ち the Norsemen の侵入が行われることに 彼らの風習であった 両者の間には(2)随分長期に scop

trelが重んぜられることはあっても、決して軽んぜられるとは考えられないのである。 その子らの所業によっても察せられるとおり、異教的で北方的な衣を容易に脱ぎすて得なかった彼らの間に、 る重要なファクタァとなっていたことは察するに難くない。そしてついに the Danes 消息を伝えるものといえよう。 しかし先に述べた Alfred などの活躍があったことは極めて当然である。 が英王となり、 が起り、 この国はノルマン人によって征服されるのである。 及び Anlaf 彼自身は従来の蛮行をすててキリスト教に帰依したが、 かくして彼ら Scôp あるいは gleomon がこもごも竪琴ひきに扮装変装してその相手をはかった逸話などは、 けれどもそれらを充分に詳かにする文献はのこっ 即ちいわゆる Minstrel は、 しかし蛮行を恣しいままにした しかしやがて一〇六六年 No. がイギリスを占拠し、 彼らの社会にお て Mins-間 な

それだから彼らが仏国への移住後も、盛んにその祖国の歌を、 俗化した土語すなわちフランス語を使用するようになったばかりではなく、風俗習慣も、 るうちに、 ようにはい ち竪琴ひきを抱えていたが、 地を得て、ノルウェーの海賊であって常に西欧各国の海岸を襲っていたが、第十世紀にフランスの王女とそのノルマンディの 930?)は初代のthe Duke of Normandy となったのであった。彼Rollo はその配下に多くの Scôp あるいはgleómon即 その かなかったが、 つの 用語はもとより祖国の言葉であった。 ノルマン人とアングロサクソン人は同族であった。すなわちその最初の主権者 Rollo 間 E か、 もともと一種の弾力、 この移住地の言葉を使用するようになった。 彼らはみな Rollo とともに北欧スカンデナヴィアからノルマンディに移動してきたのであった。 順応性をもっている民族であったようである。 彼らは、 イギリスに侵入した同族が簡単にイギリス人に同化 祖国に居った時と変りなく、 かくて彼らはその日常語として、 新移住地の感化をうけてい 竪琴に合せて歌ったので それで月日 (Hrolf or Rou, ラテン語 の経過す

北大文学部紀要

rman Conquest

ては、 用 身のイギリス王は、 教育機関で用いられる知識上の説明用語も、 なのであった。 にその ス化が当時の著しい現象であった。 まった。 より侵入して Senlac して大いに士気を鼓舞しながら、自らも力戦し、 語 61 ない しか かねるだろうが、 みなノル 学術語はもちろんラテン語であった。そして弾唱詩人たちのそれまで拠りどころとなっていた上流社会の日常 用 その他国家の法律、 フラン のは、 この国土を支配することとなった。 しその尚武豪快の られた言葉は、 即 そしてこの異る言語や異る趣味、 その風習だけであったといわなければならない。 マン・フレンチを以て話されることになり、 ス語に変ってしまった。 + Scôp) Taillefer の命によってノルマン王朝の歴史 Roman de Rou を書いた Wace(fl. 1170, d.1174?)も実は 代々 minstrel を厚遇したのは事実である。 $\stackrel{(}{\mathsf{or}}$ とにかくこの姿、 Hastings)で英軍と戦うことになるが、 もはや当時の英語には全く無縁で、 血に変化を見せたのではなかった。 諸制度、 そして竪琴ひきもフランスから海を越えてこの国に渡ってきた。大体ノルマン出 また一般の風習など、 この風習は、 公文書はもちろん教会での説教の言葉も、 があって、 この征服の結果としての社会機構の変化は大きかった。 さらにまた文学、 ついに生命をおとしたといわれる。 嗜好のものが、 Charlemagne ゲルマンの昔と毫も変ってはい すべてフランスを模倣するを以て、 従来の英語は抑えられて、 歌謡のようなものに用いられる趣味本位の 英人には通じないフランス語即ち Norman やがて一〇六六年ノルマンディ公ウィリアムは イギリスの王朝を奪い、 例えばウィリアムは Berdic その歌の内容はすでに北欧のものではなかった、 大帝や Rolland などの回教遠征 ウィリアムの軍勢の陣頭には、 市場での物品取 どの弾唱詩人もみな同じとは、 ない。 ___ その上層部に坐し、 般民衆の しかしもとのままで変っ を厚遇した。 理想とされ、 間に 引の 戦士なる弾唱 の武勇物語 特に言語 沈 商 用語 めら 業用 またヘン この少 に関 フラン 語 至る 南 特

ラ二世(1133-89)

は、 とって代って支配階級となった新たな上流社会に接することが出来なくなってしまった。そこで彼等は被征服者とな 連絡機関を失った彼等弾唱詩人は、 なる失職を意味するだけではなかった。その他の財と従来の社会的地位の喪失となったからである。 言葉が使用されてからである。 IJ 護を得ていたのであった。特に十字軍出征の折などは、英国王はつねに多数の Minstrel を引き連れて大陸に渡 ロンドンに来住し、フランス人としての姓名をイギリス風に改め、英仏と言語の使い分けまでして活躍し、国王の保 た一般下層階級の間に、その友人として参加し、流浪の芸人となってしまったのである。 ス人の中世の英語が、国民用語として公認された形になるのは、 は 史上の 事実である。しかしこれら過渡期の Minstrel は、概してフランスよりのものであった。 従来の the Anglo-Saxons 生れの minstrel であった。図 言葉の問題は深刻なものをもっていたのである。そこでNorman Conquest 及び the Danes のゲルマン系 minstrel は、その主を失ったのであった。これは単 その敵愾心などというものを別にしても、 Edward II(1284-1329)の時には夥しい数の Minstrel がフランスから 一二五八年国王の布令にはじめて彼 かって彼等が所属していた上流階級に 即ち言葉という いわゆるイ 等庶民の の結 いった

τ,

イギリスの社会機能その他に大変革をもたらしたNorman Conquest のほかに、ここでもう一つ考慮の中に入って 西欧人は未知未見の人種とその世界に接し、 そこで内部的には、 ある。 それは一〇九五年より一二七二年に及ぶ史上空前の大事件、 彼らの組織を整え、騎士道などの制度を設定してこれに応え、 彼ら自身の狭隘さと外部の広さとから、 いわゆる十字軍なのである。これによっ 新しい趣味や趣好、希望を ものの多様性を知ることに

北大文学部紀要

欧州 招来する結果となった。 併立し、 ルマンといえるノルマン系統のものをも、これに編入しなければなるまい。さらにまた、 言語的には、 が ろんこの中に包含され、 ちラテン的ローマ的なものであって、 姿を見せることとなったのは、 な恋愛などを織込んで、 Anglo-Saxons つづいてthe Danes 即ち Vikings であり、さらに言語としては南方的ではあるが、民族的、 社会的存在として大きく目立っていたこの邦の芸能の世界は、 的 の仲間入りをし、 の恋愛詩などを愛誦したのである。上層社会のフランス化、 なハ そしてやがて混合し融和したともいいうる南欧的なものが、 the ンドキャップが薄れる度合に比例して、 たちが過渡期のイギリスを飾っていたのであるが、そこに南欧的な Troubadour まづ北欧的なものである。 的 相互の影響を濃厚にした。 Lion-hearted には、 その一員となるにつれて、 そして Minstrel イギリスと大陸及び東邦とが互に結ばれることになり、 五彩燦然炮爛たるロマンスものと入り乱れて、中世を賑わすことになったのである。 言語的 自然の成行であった。 (1189-99)や素材的にもノルマンもまた半はこれに属するといえよう。 むかしのローマの流を汲むすべての外に、 これはゲルマン全体を含んでいる。 イギリスに関するかぎり、 の世界については、このことは、すでにノルマン的北仏的なもの、すなわち のような荒武者なども 内外いろいろの要素を加えて復雑多彩な存在となり、 これに呼応したのは当然であった。 そこでいまこれを大まかな線で整理すれば、 南欧化がこのようであったから、 中世もすすみ、 このことはやがて大陸特に南欧的 一つの大きな勢力といわなければならない。 したがってイギリスに限 Troubadour イギリスが欧州の西北隅 その結果中世世界は、 南フランスの ある時は、 かくして、 派 が の minstrel を自任し、 これに対立し、 Troubadour 流れ込み、 地域的、 そしてこの二つの そのは 下層階級がやがて 気質的には れば、 種 な影響を強 一つの の孤 古くは はなやか 0) 様相 共同 または 島から 様 社

ま

た

情を究明しにくいとしても、 複雑な潮 流 の間に、 インド・ゲルマン人種の 一民族としてある共通 の風習をもつケルトの bard がそ 0) 細 か な

とにかく一つの地歩をもち、

その機能を果してきたと考えるべきであろう。

実

VI

では、 かった。 歴史の流において、階層的に見るときは、 n 民族部族の移動侵入があったにしろ、 芸 能的職業人は、 すでに述べたとおり、 同文同種の間柄であったから、 自ら上層及び下層の別が生れてしまった。 発生的に見れば、 上流の支配階級に属していたのであるが、 この芸能の面に関してもその相は変らな 一〇六六年の ノルマン征服

時代になると、 もっていたのは、 ただ自ら出来た下層の芸人群は大陸のローマ系のものであり、 従来上層に屯じていたアングロ・サクソンの弾唱詩人は、 すでに述べたとおりである。 しかし同種であり、その趣味にも変更をきたしていたノルマン王朝の その芸もまた北欧的なものとは趣を異にするものを 上層より転落して下層に移らざるを得なく

なった。

でに述べたとおりである。下層階級のものの場合は、 竪琴を弾じて武勇譚を歌うことであった。 りした区別をもたなかった。そこで彼らの芸についていえば、 Ł そこでその芸能の世界もいよいよ複雑さを加えることとなった。しかしここに上層下層とい それは言葉の上では簡単にいえることではあるが、 主題は即興の歌であることもあれば、 もっと (35) 実際の場合、その芸の内容などについては、 、雑然としていた。 上層上級の楽人にあっては、その本来の使命として、 まづ軽業師 伝承の歌の場合もあった。 い、上級下級といっ (tumblers, tombeors それほどはっ それはす

北大文学部紀要

て、 文化とともにはやくからイギリスにも渡っていた。また中世も相当にすすんだ後になってではあるが、 らの動物の芸を見せたり、 がいて、犬、 ggler, jougleurs) 熊や猿などを、 スペインの闘牛のように熊などと戦ってみせることもあった。そのうえ、 もともと笑いのための笑いは ロバ、禽などに扮してその啼き声などを巧みに真似もした。さらに動物使い(bear-leader 軽業式のダンスなどもあった。また数々の小刀や球その他を投げてうけとったりしてみせる奇術師 (ju-は、 また時には馬、 がおった。いろいろの手品を演じてみせる手品師(sorcerer)もいた。また物真似師(mimes 輪抜け、 または互に相格闘させたりもした。 宙返り、 雄雞、 逆立ち、 farce (笑劇) であるが、これは mimus 兎、 犬、 綱渡り、 駱駝、 とび下りなどいう風に、 獅子などの動物をつれ廻り、 またローマ時代に行った人間と獣との格闘 諷刺を含めて爆笑を誘う道化 種 の本願の一つでもあって 々の軽業を演じた。 現代のサーカスなみに、 操人形によっ それには女芸 の類) の流 の類 を汲 これ 心もあ がい

修めて、 とするかというところにあったといえよう。 時には演じたのでもあった。そして現に彼らは、 顧客の求めに応じなければならなかった。従って彼らも、物真似から奇術、軽業、動物使い、道化、 以上述べたところは大体下級芸人たちのものであったが、しかし上流に仕える高級な芸人とても、下級芸人の芸を知らない しつけられたのであった。また他方において下層下級の芸人はその反対であった。即ち彼らは高級芸人の芸を これ を演じたらしい。 また実際に演じなかったのでもなかった。彼ら高級の芸人といえども、結局芸人であったので、 それで両者を区別する一線ははなはだ曖昧であった。 このように、 禽の真似、 小刀投げ、 芸そのものによって曖昧な区別をするほかに、 輪抜け、 ロバや犬の使い方、 そ れでその差別 時には操人形の業を心得、 人形の操り方法を学ぶよ は 彼らは その使用 何

て 所作を行う 人形芸居(puppetshow or motions)もみられたのである。

され 伴奏用 なり、 これらが逆転して、 英雄や聖者の所行、 とめるものであり、 ろで伴奏された。 しその中で最も多く用いられたものは、vielle ングロ る楽器によっても区別されたのである。 問題で、 たものらしい。 単に語られる部分も生れることになり、 のこれらの楽器のほかに、 ・・サクソン時代に特に用いられた竪琴であった。 決定的なものでなかった。 歌 これを多く用いたのは、 歌われるよりも語られる結果を招来し、 短い作の場合は、 われる主題が酒とか女とかになると、 ローマン的な冒険的な物語であり、 ラッパも相当に用いられた。 その演ずるところやものによって、上級の芸人でも、下級の楽器を使用 全篇を通じて伴奏されたが、長い作品になると、 当時の芸人によって使用された楽器は、 もっぱら下級の芸人であったようである。 その中 といって 今日の violin -に 対 話 勢その量が多くなった。 この竪琴と 抒情詩の形をとり、 記録係としての機能をのみ果すことともなっていっ の部分も採用されるということにもなり、 しかし太鼓になると、 vielle のような楽器であって、 は、 短い詩となっ そしてその際は始終の伴奏ではなく 当時相当の 結局歌声を助けるための伴奏をつ 品劣れるものとして、 所々の要所と考えられるとこ しかしこれらの区別も、 た。 数にの 叙事詩的 これにつぐのは Ű ってい 的なものは やが 幾分軽 た。 っては た。 程 7

ろい やが 存在 とにかくこの る部分とに分裂しはじめた、 ろと分極作用を起すこととなっ て前にも触れたとおり、 価値を主張することが出来た。 scop ♀ gleómon, trouvère 世の推移と共に、彼らの世界も複雑となり、 即ち歌の台本をつくる詩人と、それを歌う歌誦者とに分れはじめた。 しかしその全盛の時代は、 た。 例えば先にも述べたとおり、 など、 総じて minstrel とい 大体第十三世紀を以て終るといわなければなるまい。 かっての われたもの その職能も単純なものではなくなって、 scôp は のうたは、 中世も相当すすむまで、 語 6 やが れる部分と歌 て印刷術

らである

新興の舞台俳優の仲間に入り、 たちに、 の姿勢を変えた程度で存続をつづけ、 の芸人は、 して歌の台本を作っていた詩人は新しい事態に適応することができたけれども、 その書籍も入手容易となり、 である。 そして第十五世紀、 が 行 笑いと慰安を供給したし、 わ 強靱な生命力を発揮して、 れて、 稿本写本 六世紀とすすむにつれて、 (manuscript) 読書が日常の茶飯事となってきた時は、 あ る 奇術師、 ķ, 雑草のように、 恐らくは永遠の存在をつづけていくだろう。 は エ ではなく、 軽業師、 1) ザベス朝などの特色の一つであった流行唄の歌い手となってしまっ 中世式の高級芸人は亡びの運命を辿ることとなった。 その存在をつづけてきた。 動物使いなどは、 書籍即ち books 彼らは衰微の斜面を速やかに下りはじめた。 その庶民性のゆえに、 が生れて、 単なる歌誦者の仕事はなくなってしま 道化などは やがてこれらの芸人のあるものは 記録伝達の役を果すことになっ 依然として王侯 現在でもなお、 若干そ

VII

芸術のあらゆる分野、 ここでそうした問題に触れるつもりもないし、 れまた簡単な事柄ではない。 V. た Scop 応述べたとおりであるが、 ・ゲルマン族の一支族として、 や gleomon あるいはそれ以外のものをも含む複雑さを見せている。 及びやがてその周囲に群ることになる諸芸能の消長即ち展開及びその結果は、 そこで演劇とは一体何か、 しかし、 これらが演劇の成生と展開に如何に関係してくるのかということになると、 その大陸の居住時代からの風習として彼らイギリ またその場所でもないが、 その本質的な要素は何であろうかということにもなってくる。 しかしとにかく演劇は綜合芸術であるから、 しかし最も素朴な、 ス人の間 に重 根本的なことをい 大体いままで 地歩を占めて

見られる。 る第三者即ち一般観衆、 質や利害得失などが互に相反し、 たと考えられるころ、 大体会話少くとも対話を考えなければならなくなってくる。 必ずしも考えなければならない実情でもない。 目的があって、 自己の優越を主張するものであった。 が反抗の気持を僅かに残す一つの方法として中世の社会事情が必然的に生みだした一つの文学形式であって、 debate 古の劇的な場面として例証されるものである。つづいて中世もすすみ、アングロ・ノルマン時代に討論形式 Last Judgment)がそれであり、その一部中にマリアとジョゼフとの間に対話が見られ、 かしそのときでも audience (strife, についてである。 Cynewulf 背後から劇に手をさしのべた次第は充分考えられるけれども、直ちに劇とつながるとはいえない。 当時の弾唱詩人たちによって弾唱されたかも知れないけれども、討論 詩に い たっては、 劇の場合のように、 これにつづく行動、 argument)の文学が生れている。これはもちろん対話の形ではあるが、これは抑圧されてい (八世紀末の詩人) はやくもこの劇的要素の一つと見られる対話体類似の詩、 これらを第一義的に考えなければなるまい。まづ言葉である。 そもそものはじめ、 はいた、 相対立してゆずらない二者(例えば「夏と冬」「肉体と霊魂」などの如く)が、 ある行動を導くものではなかった。そこでこの詩は対話の効果、 それらを具現する演出者、 そして弾唱者はもちろん したがってその対話は、それぞれ自己の主張を明瞭に述べようとするところに の作といわれる Crist 三部作 (The Advent, the Ascension したがってここで特にとりあげられるものは、 41 わゆ る弾唱詩人たちは単に 中世の初期民族的弾唱詩人などの活動がまだ華か players その演出の場所、 であった。 弾唱しただけであったに相違ない。 あるいはそれを部分的に含む詩歌が さらにまたそれらすべてをうけ しかし時代がうつるにつれて彼 それは独白などを別とすれば 往々英文学における最 聴衆あるいは観衆(Au-そうした事態を その方法や 常に件 たも 詩 へであっ 互に

- 23 -

同時的 囲気をつくってくれ てこの群衆すなわち ことの好きな群衆を、 な性質と形とをもってい 批評家や小 結局已一個のために作る。 衆を意識した actors る までも群衆すなわち衆なのである。この衆に訴えるのは、 ら 一人に話しかけるのである。 のである。 は かくして演劇の生成展開に対して、 演 に観賞されるように見えるけれども、 出 たことは事実である。 したとすれ 説家も、 しかし劇は本質的にそれらとはちがったものをもっている。 それぞれ獨居の個々の読者のために作をする。 ば、 たことは、 その幼稚さその猥雑さなどは別として、とにかく、 audience 彼ら弾唱詩人などが育てたこと、 の要素をもっていたといえる。 る。 即ち身振、 すなわち彼を充分に理解同感してくれる世界中の少数者の特殊の個々人のためにつくる。 この多数の、 こうした事情は、 これが大切なことなのである。この聴衆、 は、 充分銘記されなければならない。このほか、 やがて自らの好みによって、その見もの、 表情のみならず、 間接ながらも、 特殊な、 その訴えるところは、 絵画、 つまりものをきき、 彫刻などの場合も同様である。 場合によっては、 かりにそうはいえないとしてもとにかく彼らは聴く耳や観る目を 少くとも劇のために用意してくれたことは事実である。 しかし決して看過すべからざる重要な役割を果し、 結局雄弁術とある種の音楽及び劇なのである。 つ すなわち読者の多少に拘らず、 ねに個々を対象とする。 ものを観ることのできる、 大まかな意味では演劇の屋根の下に入るもの 衣裳にまで注意したとすれば、 必然的に多数の群衆に同時的に訴えるよう 観衆は個々の一人ではないのである。 すでに触れた mimus ききものを、 これらは、 求めることは必要であっ その個 数多の観客によって 作者は四 ま たは、 pantomim Ų 0) すでに聴 個 抒情詩人は 精神に訴 特殊の雰 0) あく 一人

なってからは

人形とはいえ、

すでに芝居と銘打つからには、

演劇との関連は、

あげるまでもないことである。

その起源や展開などが明瞭ではない

が、

これが

はっきりと世上に流行するように

また人形芝居については、

かくイギリスの演劇が隆 singing, reciting などにおける伝統的技術の遺産とともに、その興隆の背後に控えているのである。 盛に赴くまで、 この国では「少くとも二百年に及ぶ演戯的な催 しものが、 装飾装備のショ

ŧ

1)演劇的本能は、 った。 国では演劇は商業化され、また恐らくそのために堕落してもい ronomy, XXII を参照。またローマにあってはギリシヤの場合 見ともいうべきものがあったらしい。後の Puritan たちの演 時には陰欝でさえあったゲルマン人たちは、南方人の明朗快活 とちがい、演劇は決して強固な芸術的形象でもなかった。この ともいえないようである。 けれども、 って彼らは自らは意識せずして教会の方針に協力した結果とな な陽性を軽薄で浮気不真面目とも観じたらしく、そのためもあ のきびしい道徳的感情を反映したようである。また剛健誠実で なったくらいである。 演劇関係にきびしかった。 土であったヘブル人の間には、 何なる民族もこれをもっているのであるが、 ローマ法律はキリスト教の勝利の前と後にかかわりなく、 俳優蔑視などは、 この偏見的精神につながるものを全然もっていない かくしてその他いろいろと複雑な事情が一種の合 未開の民族にも見られるように、ほとんど如 そしていろいろの点で教会は異教徒たち この精神については旧約の Deute-例えば執拗な観劇は離婚の理由とも ほかにも理由と事情はもちろんある 演劇的なものに対する一種の偏 キリスト教の郷

する。 ここのもにはR. Williams:the Drama of Medieval Eng-たりについては、A. Williams:the Drama of Medieval Eng-力を形成し、さしも強力な伝統につながる古典の演劇をローマー

助博士である。 2) この「苗床」という言葉をはじめて使用したのは、故木方庸land pp. 4~5その他を参照。

3) はじめ「この Scôpとか gleómon の間には格別の区別は見 用家(Borrowers)であって、下級の人たちを相手にしてい Scôp はいつも定住の Court poet であるのに対し、Gleó mon えられた。また「人によっては、区別ははじめから 存在 大な詩歌を扱い gleómon はそれより下級のものとされ、 られなかった」が、後、時代がうつるにつれてscôpはむしろ壮 Stage Vol.I,P30.11.4-5及び同書のP.34.11.3-7を参照 おこの注での引用については、 本篇では多くの場合大同小異のものとして扱っている。な ろには、少くともこうした区別は見られなかった。そこで た」とも考えられているが、しかし例のWidsithの歌われたこ はWandering singer であって、 マン本来のものではない南方ラテン系統のものを扱うものと考 作詩家というよりはむしろ借 E. K. Chambers: the Middle L

- (5) P V Coulow Arch Series Determ (Franciscons) は いマンの一部族であり the Angles とは隣りあいとなっている。(4) the MyrgingsはEider 河とElbe 河の間の地域にいたゲ
- (ω) R.K.Gordon: Anglo-Saxon Poetry, (Everyman's Lib rary) P.75. ll. 6-9.
- (6) the Medes はいまの Iran の西北部、カスピ海沿岸地域の住民であり、紀元前七世紀-六世紀に栄えた。そして紀元前の住民であり、紀元前七世紀-六世紀に栄えた。そして紀元前の住民であり、紀元前七世紀-六世紀に栄えた。そして紀元前の任民であり、紀元前七世紀-六世紀に栄えた。そして紀元前に、1115-17
- II. 15—17)
- 9 (∞) E.K.Chambers: the Medieval Stage. (vol. 1, P.28. 28–30 リヤに入り、 キリスト教が伝えられたのは南と北とからであった。 西岸沿いの小島 lona.に、St. Columba によってアイルランド の主導力となり、この国のキリスト教化及び文化水準の向上に は南の伝来よりもわずかにはやく、五六三年スコットランドの ローマよりのキリスト教がカンタベリに伝えられた。 五九七年パリよりケント王室に、 ケルト系のキリスト教が伝えられ、ここからさらにノーサンブ アングロ・サクソン人の大ブリテン島占取以後、 一時はこの流派の活動が、イギリスのキリスト教 即ち St. Augustine によって この国に 北の場合 南では、
- 初のすぐれた Latin writer であり、宗教詩を広めた。当時の(675)またBishop of Sherborneであった。イギリスにおける最(0) Althelm (640? -70) は、はじめ Abbot of Malmesbury

つくしたその功績は甚だ大きい。

- 文化運動の指導者であったといえよう。
- (1) バイブルなどの理解においては、しばしば聖者は北欧の戦(1) バイブルなどの理解においては、地獄なども単なる業火士とまごうような描写をうけているし、地獄なども単なる業火士とまごうような描写をうけているし、地獄なども単なる業火力をはいると、はばしば聖者は北欧の戦
- Mill Judith はApocrypha 中のthe Book of Judith の女主人公で彼女をヒロインとしたold English 時代の、作者不明の詩でthe Assyrians の王 Nebuchadnezzar の軍隊が、彼女の町、Bethulia をおびやかした時、彼女は一身を犠牲にして敵陣に入り、その将Holofernes の首を斬って、その町を救うというか高が、その詩の内容や情調が、当時の英雄叙事詩そのまゝで、ハープに合せて弾唱するのに、まことにふさわしいもののように思われる。なおこの物語は、Abercrombie やHebbelをはじめとし、世界各国の作家に悲劇的名篇への主題を与えている。
- (3) Cf. E.K. Chambers: The Medieval Stage, vol. I.P. 31. (14) Alcuin (735- 804) York に生れ、そこの修道院で教育される。七八二年フランク王 Charlemagne に文化指導の顧問として招かれ、その文化推進に大うに力を致したことは、史上に特筆されることである。後、退いて Tours の St. Martin の修 道院長として余生を送る。当代第一級の学者で彼によって当時道院長として余生を送る。当代第一級の学者で彼によって当時が表している。 いんだい こうしょう いんしょう いんしょう にんしょう にんしょく にんしょく にんしょう にんしょく にんしょく

- 州における盛名は現代人には信じられないほどのものである。 E. K. Chambers: The Medieval Stage, vol. 1, P. 33,1. 9
- なお、このあたりについては、前掲 E. K. Chombers: The
- Medieval Stage vol.Iの三十二頁のあたりを参照。 E. K. Chambers: The Medieval Stage. vol.1, P. 34. 11. 18-19

Tamburlaine) はこの地の牧夫であったともいわれている。 帯の地域をいう。いまはソ連領。例の Timur (Marlowe の Attila (? — 453) はthe Huns 即ち「匈奴」の王である Scythia は、いまのBlack Sea と Caspian Sea の北部

からゲルマン人ではない。

launian field の激戦で、西ゴス及び、ローマ人連合軍のため 脅かした。そこでその翌年の彼の死には、西欧は安堵の胸をな The Scourge of God といわれたが、四五一年七月北仏 Cata-でおろした。 に破られた。しかし翌年軍を新たにして北伊を襲い、ローマを 王のヨーロッパ侵入は、彼ら欧州の大きな脅威となり、 彼は

- 20) Chanson de geste は、第十一世紀から第十三世紀に亘 その中でもCharlemagne の甥Roland を主題にしたChanson の代表の一つでもあり、英のアーサァ王物語に相当するもの。 trouvère がつくったフランスの英雄詩であり、中世ロマンス って Charlemagne と十二の勇士を材料として、北フランスの Roland が最も有名。
- 21 を襲い、その南岸に上陸した。かくして、彼らの侵入はよ デーン人のイギリス侵入は、七八七年はじめて Devonshi

この時まで二百余年の長年月に及んでいる。 nburh などの激戦も行われ、時にいろいろの消長はありながら に走らせて、 孫のWest-Saxon 王国を悩ましつづけMaldon 及び Bruna 年王となる)治下の Mercia を襲い、アルフレッド及びその子 うやく本格化し、北方ではその盛時といわれる Offa (七五七 ついに一〇一三年 Ethelred 王を王妃の生国 Normandy イギリスを制圧してしまう。侵入をはじめてから

(2) cf J.J.gusserand: English Wayfaring Life in the Midd 23) このあたりについては、 stminster の自室に、四人の弾唱詩人を招き入れているくらい 弾唱詩人との盛んな交渉を誌している。Edward II などはWe 後を、また同じく前掲の E.K. Chambers の四七頁以後を参照 dle Ages. P. 103, 105 and E.K. Chambers: the Medieval またこの Edward II を話題とする前後には、彼につらなる諸王と Stage vol. 1, P.43 前掲の Jusserand の一○七頁以

2) 一二五八年十月十八日附でヘンリ三世の発した布告文はフ 与えられていたからである。またいろいろの原因から起った に与えたはじめであった。 来、イギリス古来の名称即ち被征服者の呼名を征服者がその子 ward(後の Edward I)と命令されていた。ノルマン征服以 年王とその王妃 Eleanr of Provence の間に生れた王子は Ed ランス語のほかに英語でも書かれていた。それより先一二三九 である。 (例えば William, Henry, Stephen, Richard, John など) と それまではみなフランス風の名称

論はすべて英語によるべしという法案が可決された。そしてそ にとの規定が設けられ、つづいて一三六二年十月の議会での弁 sex の地方栽判所では、 するまでには、 の翌年の開院式では、大法官が式辞を英語で述べている。ノル ン征服以来、王座をうばわれた英語は、再びその王座を回復 |情の変化もあって、一三五六年には、 長い年月の経過が必要であった。 法廷での弁論はすべて英語によるよう ロンドン及び Middle-

- このあたりの事項については E.K. Chambers: The Medi-
- 26 val Stage. vol. 1の七○頁cf. E.K. Chambers: The Medieval Stage. vol I. PP. ――七二頁あたりを参照
- 27 cf. E.K. Chambers: The Medieval Stage. vol. II. PP

83 - 84

- strel's regular stock in trade' (The Medieval Stage gue then, in one shape or another, was part of the min-用したことは当然考えられる。そこで、 者の創意ではあろうが、この親和感とつながるものをもっとい えよう。 であり、 クソン時代から対話体には自然な親和感をもっていた」よう E.K.Chambers もいうとおり「英文学では、アングロ そして弾唱詩人たちも語るとき、この対話の方法を採 Cynewulf のCristの中に見られる対話の部分は作 11. 9-10) といっている。 Chambers 🖘 Dialo-
- 文学に関して、The Harrowing of Hell (作者不明の十三世 「討論詩」すなわち debats(strifs or estrifs の形式

けて、 トは、 宗教的教訓を念とした討論詩というのが当を得た意見であろう。 実際のところ、 論の文学というよりは、劇であるといいたいのである。 この形式が対話ではあり、 の警告があり、 彼らの救出と感謝が示され、 とがわかり、 それによってキリストは地獄の門を破って悪魔を縛りつけるこ 互にゆづらない。 天地はそちらのものだが、地獄はこちらのものであるといって ものだといって、 てわが輩のところに来たから林檎を与えたので、 きとがめる。 の死をのべ、 この独語で、 きの次第を語り、その救出のために、 を破ってこれを解放するのである。まづ語手は人間 悪魔はこれを峻拒して対抗する。 人物であり、 悪魔、 エーブラハム、デーヴィッド、ジョン、モーゼなどが登場 つぎのようにいったとして、 自分のものを救いに来たという。 0) 詩)が問題 またつぎにキリストと David キリストは悪魔にその返還を要求するけれども、 そこでキリストと悪魔の問答がはじまる。 キリストは、人間救済のための苦難と十字架上で これから救出にとりかかるというのを、悪魔が聞 くわしい吟味は、 最後に語手の天国への祈によって終るのである。 ゆずらない。 つぎにキリストと地獄の門番との対話となり 地獄に捉 われている人間即ちアダム、イ にされる場合がある。 行動を想像して附加出来るので、 つづいて一般人に対するキリスト ついに議論はその領分に及び、 ここではその場所ではないが キリストはついに地獄の扉 キリストの独語を導く。 キリストは地獄に出 悪魔は、 以下の対話により 内容は、 それで自分の アダムが飢え 0 地獄ゆ キリ しかし キリス

(3) M.C.Bradbrook: The Rise of Common Player. P.17. II.21-24.

ただ幼稚ながら劇の形式に接近したという点では、この国にお

- 29 **-**